

# 英語学習は 「時間確保」「継続」が 成功のカギを握る

この5年間で英語力を向上させた社会人500人の  
英語学習の実態と課題

リクルートマネジメントソリューションズ  
組織行動研究所

所長 古野庸一 主任研究員 宮崎 茂 主任研究員 藤村直子

## はじめに

新興国の台頭や、専門性・優位性を有する分野以外でのグローバル展開に見られるように、企業・事業のグローバル化も新しいフェーズを迎えている。従来以上にグローバルに活躍できるリーダーの絶対数が必要となり、要となるスキルの一つは「英語でのコミュニケーションスキル」と言えよう。入社や昇進・昇格の基準にTOEIC得点を用いたり、社内公用語の英語化に踏み切ったりする企業も出てきている。

必要となる英語力は、仕事の内容・役割によって異なるものの、学生時代に英語を学んでベースがある程度できているにもかかわらず、英語を使いこなすことができない社会人は相当数存在する。そ

して、必要に迫られて、もしくは将来のために英語学習を再開する際に順調に進められている人ばかりではない。

グローバル・リーダーの育成、本社のグローバル化の一環で、英語学習について弊社にご相談いただくことも増えてきている。そこで、社会人になってから英語が上達した人を対象とした調査を行うことによって、英語学習の課題と、その乗り越え方を明らかにすることを試みた。本報告では、その結果の一部をご紹介します。

## 調査概要

調査概要は図表1のとおりである。この5年間で英語力が上昇した人を対象として英語の利用経験、学習経験について聞いた。対象者の抽出は、TOEIC受験者につ

いてはTOEIC得点を、TOEIC未受験者については自己評価結果を用いた。

定量調査実施後、10名に対してインタビューを実施した。インタビューでは、定量調査結果を補完するようなエピソードを抽出するために、学生時代および社会人になってからの英語学習の方法や今後の目標、学習をする上での問題について聞いた。

## 仕事場面での 会話機会が少ない

過去5年間のオフィスで英語を使う頻度としては、「毎日」は「読む」3分の1強、「書く」5分の1強、「会話」10分の1弱と、順に頻度が下がっていく。会話として英語を使用する機会が多いわけではないことがあらためて確認された。そのようななかでも、現在のTOEIC

得点が高いほど、使用頻度が高い傾向が見られる(図表2)。

インタビューにおいても、TOEIC800点以上の方は、700点台の方に比べると仕事で使用する機会に恵まれていた。例として、インドのビジネスパートナーと毎日英語で仕事のやりとりをしなければならない期間が約2年続いたというケースや、外資系企業への転職をきっかけに英語によるレポートやプレゼンテーションの必要性が急増したケース、また海外部署への異動により、年に数回、1週間程度の海外出張に行くようになったケースなどがある。これには、英語力の向上によって仕事で使う機会が増えた、仕事で使う機会があるから英語力が向上した、いずれのケースもあるようだ。一方、700点台の場合は、仕事で英語を使う機会は少なかった。あるとしても、メールでのやりとりや、英語の社内資料を読むといった程度にとどまり、「聞いて話す」機会にはなかなか恵まれていないのが実情のようである。双方向での「聞いて話す」機会は、ほとんどが英語学習の場で、ということのようだ。

### 学習目的は、切迫したものだけではない

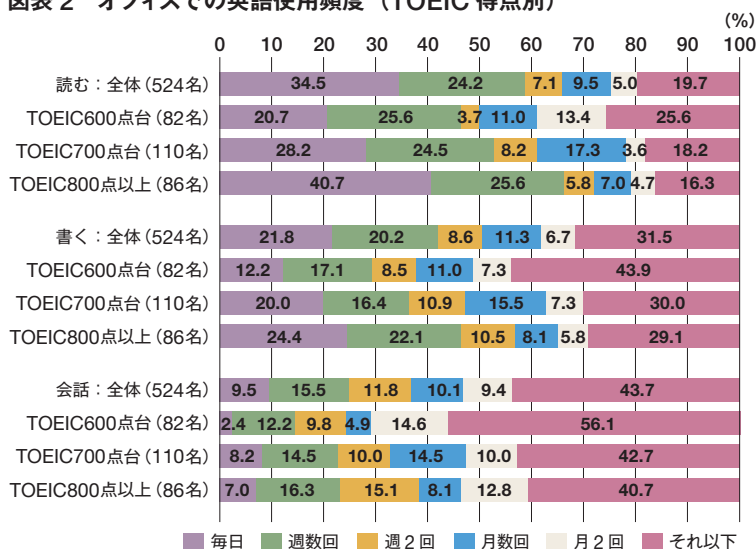
過去5年間での英語学習の目的・理由をたずねたところ(複数回答)、「仕事を進める上で必要」(58.0%)、「仕事を進める上でいずれ必要」(33.8%)、「英語でニュースを理解したい」(30.2%)、「資格試験」(29.0%)、「海外旅行」(27.1%)が上位となった(図表3)。必ずしも「仕事を進める上で

図表1 調査概要

※協力：日米会話学院

調査目的	社会人で英語力が向上した人の英語学習の特徴を明らかにする
実施時期	2011年3月
調査対象	25歳～54歳の会社勤務、大卒以上 524名 現在のTOEIC600点以上(TOEIC未受験者は自己評価で同程度相当) 5年前に比べてTOEICもしくは自己評価が上昇した人(100の位が上昇した人)
調査方法	インターネット調査 および インタビュー調査(上記対象のうち10名)
調査内容	・基本属性(性別、年齢、居住地、業種、職種、役職など) ・英語力(現在、5年前、学生時代) ・英語利用経験(オフィス、海外出張、海外赴任、留学) ・英語学習経験(目的、学習時間、成果、内容、方法、課題など) ・人物特徴(英語学習に対する考え方、社交性、新しいことを学ぶ方法など)

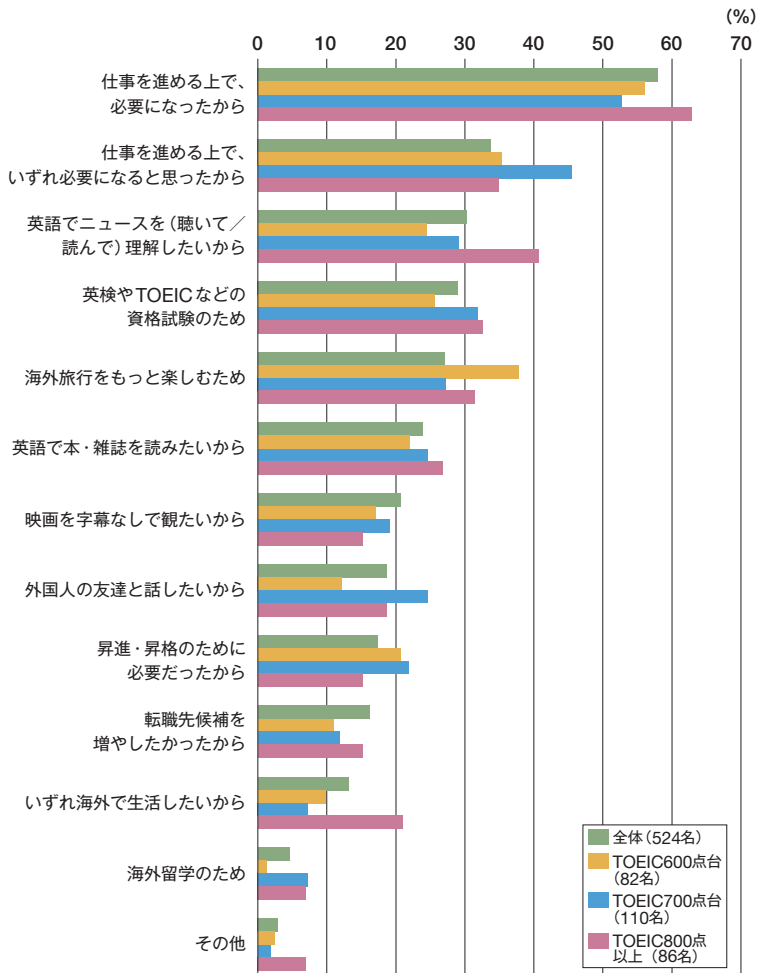
図表2 オフィスでの英語使用頻度(TOEIC得点別)



必要」「昇進・昇格のため」といった切迫したものだけではなく、「仕事を進める上で必要」の具体的な内容としては「取引先とのやりとり」(64.8%)、「海外出張」(35.9%)、「社員に外国人増加」(26.0%)、「会社の制度で資格試験受験必要」(25.7%)などであった(図表4)。TOEIC得点別には「仕事を進める上で必要」は800点以上の、「仕事を進める上でいずれ必要」は700点台の比率が最も高く、「昇進・昇格のため」は600点台と700点台の比率が高かった。

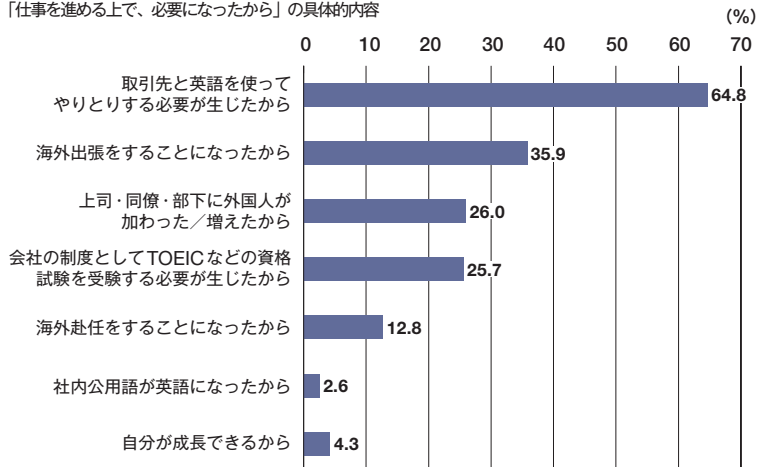
インタビューでも、仕事をする上で欠かせないという理由は800点以上に見られた。日常的に英語を使用する環境にいるため、あるいは頻度多く必要なわけではないが、身近な同僚が英語を使用して仕事をしている環境にあって、同僚の英語力(TOEIC得点)が自分より高いことに対する焦りがきっかけとなっているようなケースもあった。また似たようなケースとして、英語を得意とする同僚と一緒に仕事をする事が多く、迷惑をかけたくないということがき

図表3 英語学習の目的・理由（TOEIC 得点別）（複数回答）



図表4 英語学習の目的・理由

「仕事を進める上で、必要になったから」の具体的な内容



かけで、より学習に身が入っていくという回答もあった。いずれにしても仕事で使いこなせることを当面の目標としている。

一方、700点台の場合、すぐに必要なわけではないけれども、将来に備えて学習を継続しているという傾向が見られた。例えば、英語を必要とする部門への異動に希望を出すための準備や、いずれ転職するときのために武器として英語力を高めたいという意見などがあつた。共通していたのは、「使える英語」として自分のものにしたいという声であつた。どうやら「聞いて話す」ことを自然に行えるように実力を高めたいということのようだ。目的ははっきりしているものの、いつまでにという具体的な時期が定まっていない傾向が見られた。

### 学習時間が足りていない

図表5、6、7は集中的に学習した期間（目安として「1週間に3時間以上学習した」期間）について示している。「3年以上」週あたり「3時間」学習した比率が最も高く（10.9%）、続いて「数カ月」週あたり「3時間」（7.8%）であつた。期間は「3年以上」が全体として最多で（23.3%）、とくにTOEIC800点以上の比率が高い（33.7%）。一方600点台は「数カ月」の選択率が最多である（22.0%）。週あたりの学習時間数は全体として「3時間」が最多だが（41.6%）、「5時間」「7時間」「14時間」は600点台よりも700点台、800点以上の比率が高い。総じて、週あたりの時間の捻

出は難しいものの、継続して行うことによって英語力を向上させているようだ。

また、「高校や大学まで英語教育を受けた人が仕事上でNon-Nativeとして十分コミュニケーションできるようになるのに必要な学習時間」と実際に「社会人になってから英語力向上のために費やした時間」について聞いた。必要なのは「1000~3000時間」だが実際に費やしたのは「500~1000時間」、必要なのは「500~1000時間」だが実際に費やしたのは「500時間未満」という回答が多かった(図表8)。必要な学習時間が「5000時間より多い」との回答はTOEIC800点以上の比率が高く(図表9)、実際に費やした時間も「5000時間より多い」が他得点群より比率が高い(図表10)。実際に費やした時間が「500時間未満」は600点台が最多であった。現在の英語力が高い人は、英語学習に相当量の時間を費やす必要性を認識し、実際に時間を費やしているという結果となっていた。

### 学習方法は多岐にわたる

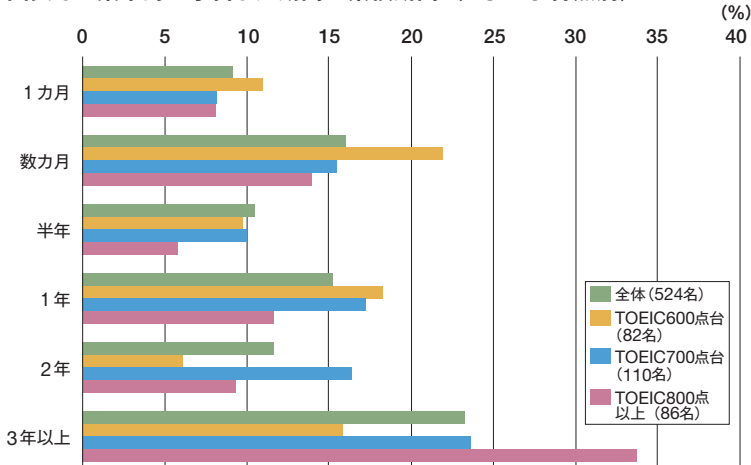
「集中的に学習した期間内に行った学習内容」(複数回答)は、「学校」(40.3%)、「市販の英語教材」(36.3%)、「書籍」(30.3%)の順となっていた(図表11)。TOEIC800点以上となると「新聞・雑誌」「映画やドラマ」といった実用的なメディアを通じて学習している割合が高かった。

また、「効果のあった学習方法」について自由記述でたずねた結

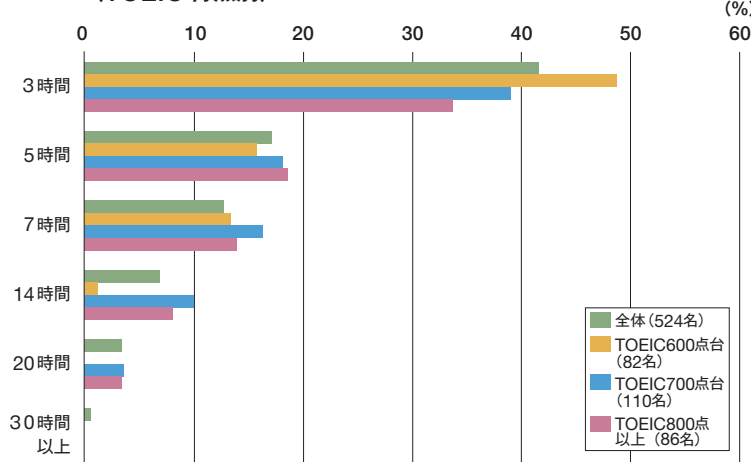
図表5 集中的に学習した期間の累積期間と1週あたりの学習時間数

		平均的な1週あたりの学習時間数						あてはまるものはない	計 (%)
		3時間	5時間	7時間	14時間	20時間	30時間以上		
集中的に学習した期間の累積期間	1カ月	5.2	0.8	1.1	0.4	0.0	0.0	1.7	9.2
	数カ月	7.8	3.6	2.1	0.8	0.6	0.0	1.1	16.0
	半年	6.5	1.0	1.3	0.4	0.6	0.0	0.8	10.5
	1年	6.1	3.6	2.7	1.3	0.4	0.4	0.8	15.3
	2年	4.4	3.4	1.5	1.3	0.8	0.0	0.2	11.6
	3年以上	10.9	4.6	3.8	2.5	1.0	0.2	0.4	23.3
	あてはまるものはない	0.8	0.2	0.2	0.2	0.2	0.0	12.6	14.1
	計	41.6	17.2	12.8	6.9	3.4	0.6	17.6	100.0

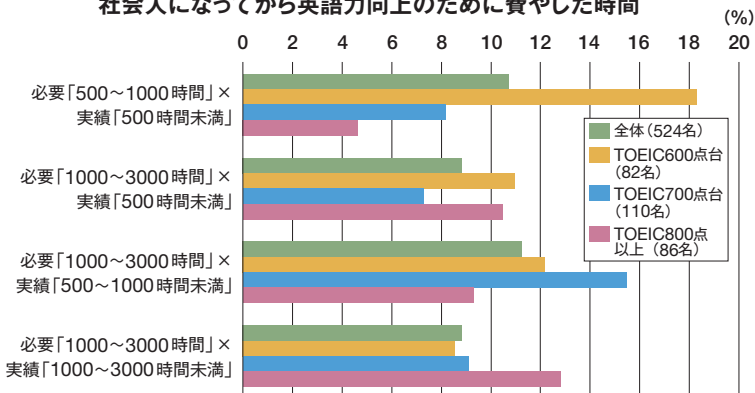
図表6 集中的に学習した期間の累積期間 (TOEIC 得点別)



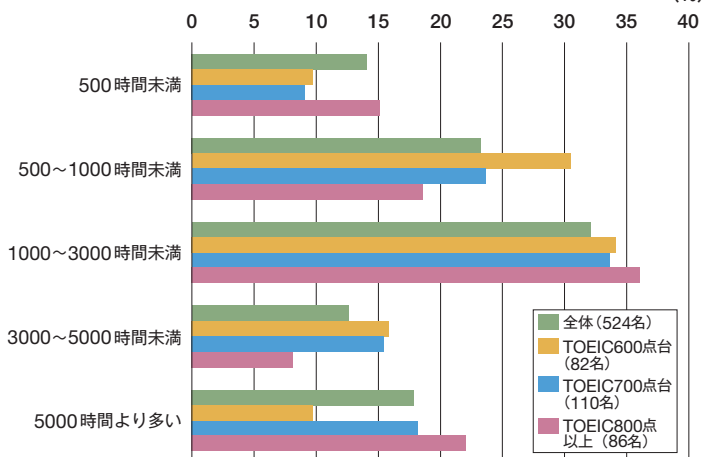
図表7 集中的に学習した期間の1週あたりの学習時間数 (TOEIC 得点別)



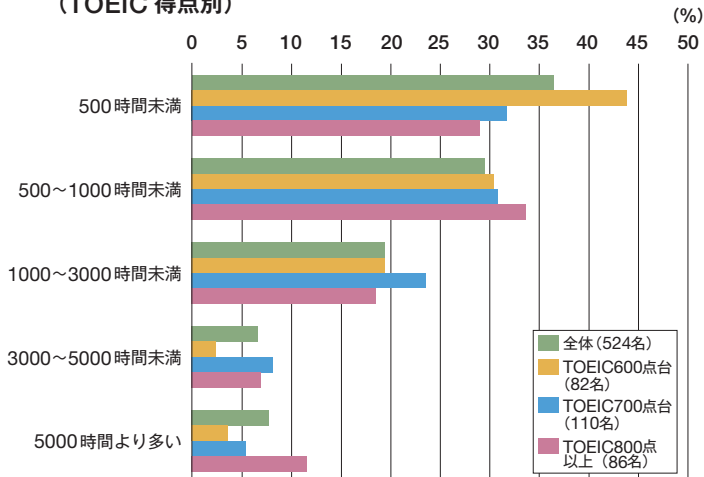
図表 8 仕事上で Non-Native として十分コミュニケーション  
できるようになるのに必要な学習時間と  
社会人になってから英語力向上のために費やした時間



図表 9 仕事上で Non-Native として十分コミュニケーションできる  
ようになるのに必要な学習時間 (TOEIC 得点別)



図表 10 社会人になってから英語力向上のために費やした時間  
(TOEIC 得点別)



果を分類したところ、トップ3は「実践機会」(仕事で使う、ネイティブとの会話など)「多聴、Podcastなど」[英会話学校]という回答であった(図表12)。TOEIC得点別には、「実践機会」「ラジオ講座、テレビ講座」「映画、ドラマ、音楽など」は800点以上に、「多聴、Podcastなど」「ニュース」は700点台から800点以上にかけて、「英会話学校」は600点台から700点台にかけて特徴的な回答だった。600点台から700点台は3割程度が「なし」との回答だった。

同様に「効果のなかった学習方法」についての自由記述を分類したところ、「参考書」「単語の暗記」「英会話学校」などが挙げられていた。理由として多いのは、「飽きる・単調・面白くない」「続かない」「効果がない(感じられない)」「できない(能力に合わない)」「定着しない」などであった。「ある程度強制力がないと続けられない」「会社から与えられたものは興味をもてない、自分でお金を払わないとだめ」というように、意見もさまざまであった。効果のないものは「なし」と回答した理由として、「効果がないものはない、やれば何かしら効果がある」という回答が一定数あったのも印象的だった。

「やる気を継続させるために行ったこと」(複数回答)のトップ3としては「自分で目標を立てる」(38.0%)「決まった時間にスクールに通う」(29.6%)「テストを受ける」(29.4%)であった(図表13)。「その他」の自由記述で回答が多かったのは「会話の機会をもつ」「楽しむ工夫をする」などであった。

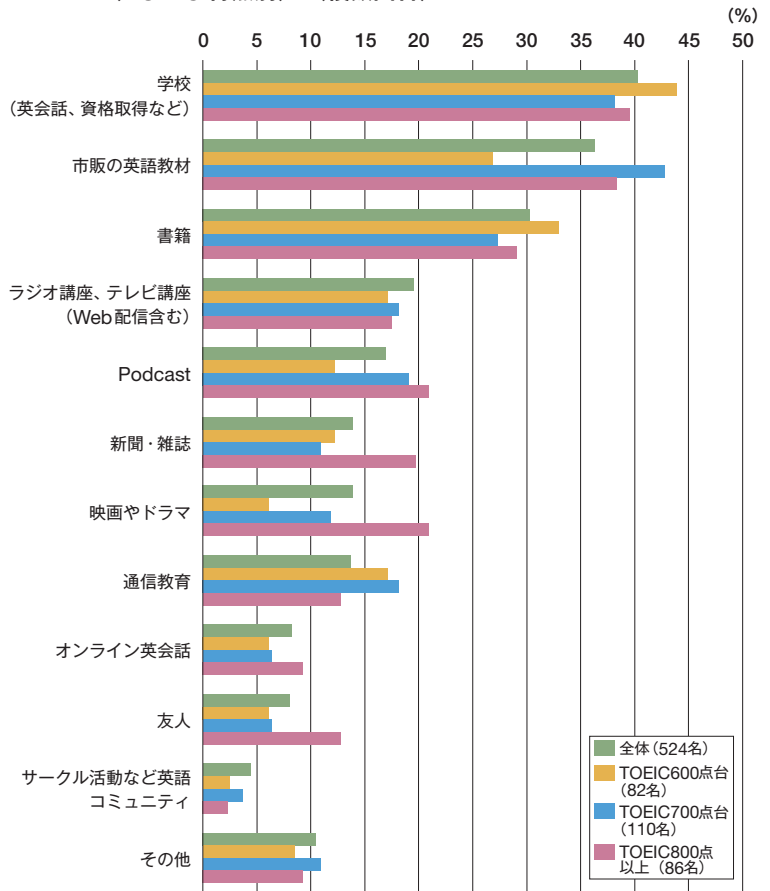
このように、学習内容は多岐にわたるものの、効果のあるもの、ないものにはなんらかの傾向がありそうだ。

インタビューでは、TOEIC700点台の人が最も多く取り入れていたのは、ニュースや教材によるリスニングだった。学習教材は、一般に評判の高いものを使っているようであった。次に多かったのは、NHKなどのテレビ・ラジオ講座やTOEIC対策学習だった。これらはいずれも独学のため、英語力の変化や学習の効果を自分自身で確認することが容易ではないという点で共通していた。双方向で「聞いて話す」学習が不足しているという自己認識は強く、インターネットを利用した会話プログラムなどを検討しているケースもあった。

さまざまな学習方法を試そうとしている背景には、学習時間の確保という問題があるようだ。通勤時間を利用した学習方法として、リスニングを中心とした学習に一定の人気があるようだ。なかには、毎日往復3時間の通勤時間を1年間学習に充てたというケースもあった。単純に見積もっても年間600~700時間の学習時間を確保したことになる。他には、短くても必ず毎日学習のための時間を確保するといった徹底タイプから、週末にまとまった時間を確保して学習するという集中タイプまで、実にさまざまであった。

継続するための工夫として興味深かったのは、毎日の学習時間を記録として残し続け、自分の総学習時間を確認することで持続性を高めるといった意見や、自分が

図表 11 集中的に学習した期間内に行った学習内容 (TOEIC 得点別) (複数回答)



納得できる学習方法を見つけるまで妥協しないといった意見であった。

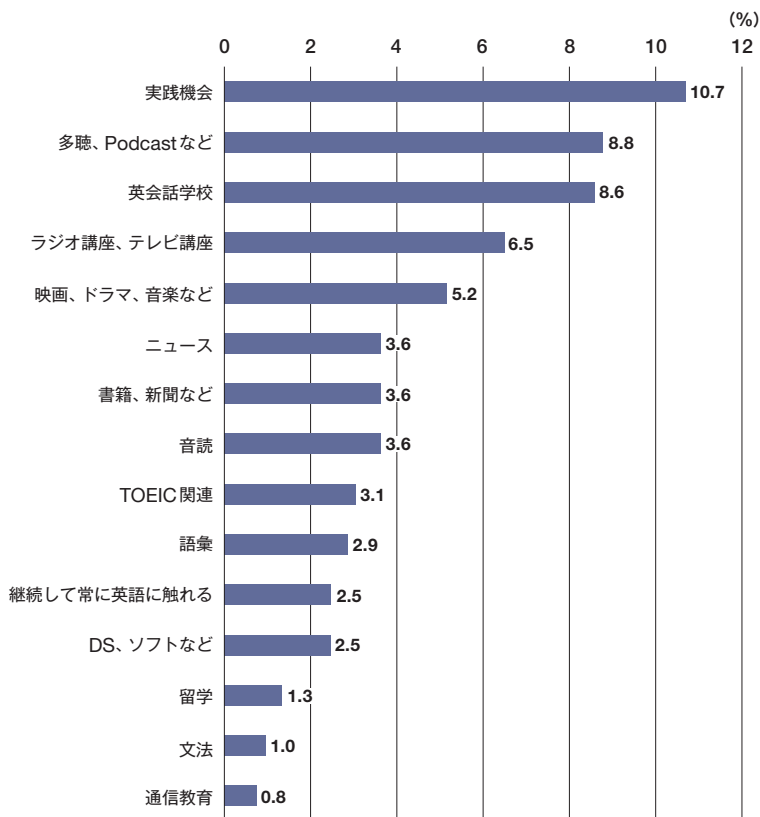
TOEIC得点800点以上になると、過去に受講した英会話スクールの体系立ったプログラムが基礎学習として役立っているという声があった。また、ネイティブと話す機会を定期的に作って継続されている人は、その効果を認めていた。シャドーイングやディクテーションは簡単ではないが、力は確実につくという意見も少なくなかった。

英会話スクールの利用方法で多かったのは、週に2回程度のレッ

スを2~3年間続けるパターンだった。実際に会話をする機会の確保、学習ペースの維持、最適な学習法の選択という観点で考えると、このようなスクールが果たす役割は小さくないようだ。ただ一方で、最初の数カ月間の効果に比べて、その後の効果はあまり上がらなかったという感想もあった。

自分の英語学習の転機となった学習方法に関するエピソードもいくつかあった。社会人になってすぐ、3000ページを超える英語小説を読破したことが自身の英語学習の転機になったという人や、さまざまな学習教材があるなかで、

図表 12 効果のあった学習方法（自由記述）



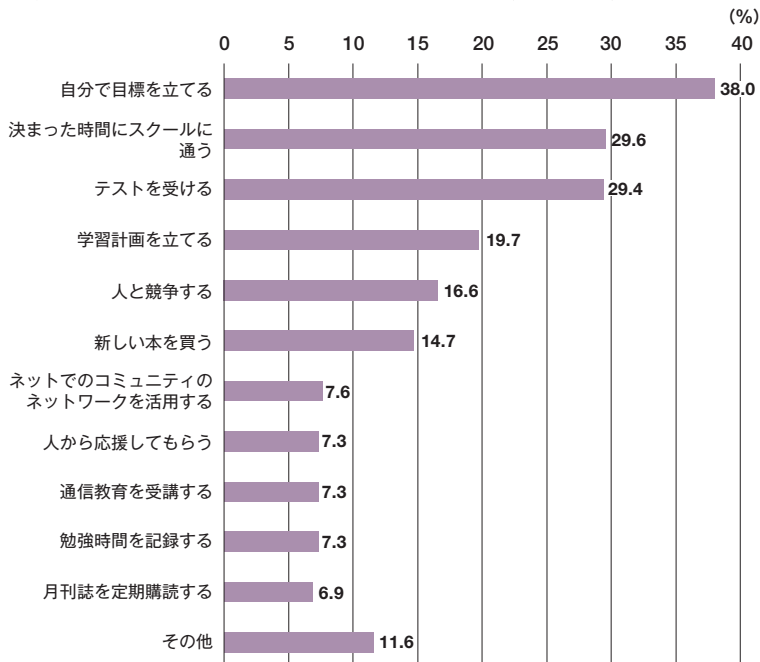
1冊の教材を使ってシャドーイングを繰り返し、完璧に仕上げきった経験が、自らの英語学習や英語力に対する自信につながる転機だったという人もいた。一定期間に英語力が向上した何人かは、一つのことを集中的にやりきったというような、学習の転機となる体験があるようである。

**課題は、「時間確保」「継続」「実践機会」**

最後に、図表 14は「今抱えている英語学習についての問題点や悩み」に関する自由記述回答を分類した結果である。トップ3は「時間」(時間がとれないなど)、「意欲・継続」(モチベーションが続かない、継続が大変など)、「実践機会」(話す機会がない、使う機会がないなど)であった。TOEIC得点別には、600点台は「効果的な学習方法が分からない」「伸び悩み、成果・効果が見えない」「語彙」に関するもの、700点台は「リスニング」「ライティング」「発音」「TOEIC」に関するもの、800点以上は「会話」に関する回答が特徴的だった。

インタビューからも、社会人ということで学習時間の確保が最も深刻な課題となっていることが窺われた。一定レベルに到達するまでに、まとまった学習時間が必要と言われていた英語学習では、留学や日常的に仕事で使用するような環境に身をおける人が限られていることを考えると、通勤時間や休日の集中学習などの工夫が精一杯という実態がある。今回のインタビューでは、入社直後は、さほど重要な仕事をしていないので

図表 13 やる気を継続させるために行ったこと（複数回答）



学習時間を確保しやすかったものの、今では、1日の多くの時間を仕事にとられ、学習時間を確保することがそう簡単ではなくなっているという切実な声もあった。1日あたりの学習時間の確保が難しい社会人が総学習時間を増やすには、結果的にいかに学習を継続できるかが重要となってくる。

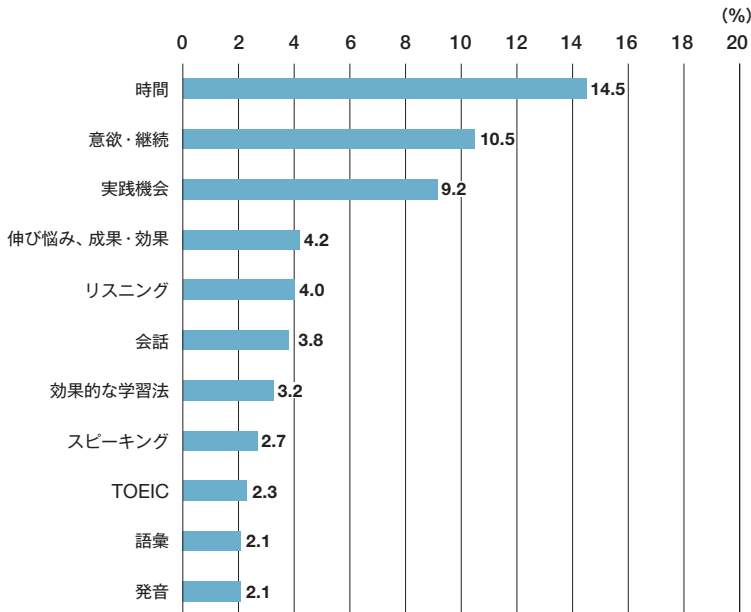
英語学習を継続する上で、何人かはモチベーションを維持することが大事と言っていた。単純な学習を何カ月も続けることは簡単ではなく、また独学の辛さは、前述したように学習効果をその都度確認しづらいことである。したがって、「いつまでに、このレベルまで到達しないと仕事にならない」といった「目標に対する切迫感」か、もしくは目標そのものが曖昧だったり低かったりしても、自分に合ったテキストや学習方法を見つけることで「学習プロセスそのものを楽しめるということ」のどちらかが重要となってくる。

今回のインタビューでは、800点以上の人は、より学習の目的が具体的だった。例えば、ディスカッションで自分の意見を正しく伝えるための学習に力を入れていきたいという意見や、更には毎日仕事で英語を使っている人でも、より適切な表現にするために、今後は文法を学習する、といったようなものだ。

また700点台の人は、「聞いて話す」実践力を鍛えたいが、よい学習法が見つからないという共通した課題があった。

そのような人には、自己分析して学習法を探すことと合わせて、

図表 14 今抱えている英語学習についての問題点や悩み（自由記述）



今の自分に最も合った学習内容・学習法を、客観的にアドバイスしてくれる存在も必要だ。限られた時間のなかで英語力向上のためには、自らの弱点を把握し、それを補う学習が必要だが、自分一人ではなかなかそこまで分析できない。英会話スクールなどは、それを解決する一つの手段であろう。

### おわりに

英語学習では100人の達人がいれば、100人のやり方を勧める。本調査で、実際の英語学習者に学習時間や効果のある学習方法を聞いてもさまざまであることが再確認できた。一方、学習成果をあげている人の共通点としては英語学習を継続している点が挙げられ、現在の英語力が高い人ほど時間を費やす必要性を認識し、実際に時間を費やしているということが示唆された。

社会人にとっての英語学習は、必要に迫られた切羽詰まったものではないケースも多い。仮に企業でTOEIC基準を定めるなど英語学習の必要性がある場合でも、企業が全従業員の学習を支援できるとは限らない。そうになると、個人人の「時間」「意欲・継続」という課題がより大きくなるだろう。それをクリアするには、まずは各々が必要な学習時間を認識し、継続するための“自分なりの”方法論をどう組み立てられるかがカギとなりそうである。自分の英語力に合った学習内容をどう選択するか、ということはもちろん重要であるが、“自分に合った”学習方法で“続けていくこと”を第一義に置くことが、結果として英語力向上に寄与すると言えそうだ。